

奄美相撲の歴史と文化(奄美市立奄美博物館 久 伸博)

1. 江戸時代～明治時代

(琉球的な相撲と薩摩藩及び本土から影響を受けた相撲)



「琉球寫真景」:名護博物館所蔵

1800年～1845年頃にかけて描かれたと思われる
「琉球寫真景」に描かれた「相撲」(大和式の相撲)



「南島雑話」に描かれた「嶋人相撲」

1850(嘉永3)年名越左源太が小宿村に流され(~1855),
在島中に『南島雑話』を著す

間切(マギリ)相撲や集落対抗の相撲
(代官や与人・役人の関与)

※大正初期まで土俵は、藁カマスに砂を入れた俵で作っていた。
土俵の周りを49の俵で正方形に囲い、その内側に16の俵で円形を作り、中に砂を入れたものであった。
「ふるさと屋鈍の譜」(昭和60 向實盛著)より

2. 「大島相撲協会」の設立・「協会相撲」のはじまり

明治後期 ~大正初期
・瀬戸内町西古見「金刀比羅神社奉納相撲大会」がはじまる。
・笠利町で「招魂祭相撲大会」がはじまる。

1919(大正8)・海軍相撲二段の「山下辰次郎」(屋鈍出身)が満期除隊して帰郷。

1920(大正9)・「大島相撲協会」の設立・「協会相撲」のはじまり



大正9年「大島相撲協会」発足記念の写真



「大島相撲協会」の優勝旗



山下辰次郎の化粧まわし

「山下の堅牢遂に敗れ 新横綱は民友則君」の見出しで大島全島相撲大会の結果掲載。

「八月二十七日から、三日間に亘り名瀬町御殿濱に開催された、大島相撲協会主催の全島相撲大会は十年に亘る常勝軍横綱、山下辰次郎氏引退声明により、果敢人気の沸騰を来し、空前の盛況を呈した。

而して、十年の間、横綱の王座に君臨せる山下辰次郎氏も遂に屋鈍の民友則君に敗れ、名誉の優勝旗は大関組は九州山(民友則君)へ、関脇組は大砲(福井眞佐君)へ授与された。」

昭和7年10月1日発行の「日本大観南嶋」10月号

3. 戦後・行政分離期間中の「協会相撲」の再興（大島郡相撲協会主催）

・昭和21年(1946)年に大島郡相撲協会主催で、第1回目の「協会相撲」が行われた。1917(大正6)年に始まり、1931(昭和6)年に中止されたままだった「協会相撲」を再興するものであった。
(1958年10月20日「南海日日新聞」)

・「名瀬の御殿浜を会場にして団体戦と個人戦が行われ、団体戦の優勝は古仁屋、2位宇検、3位名瀬、個人戦の優勝は鳥入氏、協会相撲盛況裡に終了」と報じる。
昭和21年10月6日「南日本新聞特報」

・参加チームは、龍郷、名瀬、三方、住用、宇検、古仁屋、西方、鎮西、実久、東天城、天城、和泊の12チーム。
(1947(昭和22)年10月12日の「奄美タイムス」)



・「名瀬市における協会の大会は奄美復興博覧会協賛相撲にし、第2回協会相撲は10月10日から3日間、古仁屋町にて開催することに決定。」と報じる。
1947(昭和22)年9月13日の「奄美タイムス」

・1955(昭和30)年9月、ウドン浜特設土俵で「第3回大島郡相撲協会主催市町村対抗相撲大会」開催。
(1955(昭和30)年9月12日 南海日日新聞)

※「協会相撲」は、昭和30年の「第3回大会」が最後。
昭和31年から「若人の祭典」に引き継がれる。

1946(昭和21)年10月に開催された「第1回大島郡相撲協会」(協会相撲)において、優勝した古仁屋チームから出場した徳田田嘉(徳田嘉)が協会からもらった最高位の「大関の御幣」(サク) ”トクダ タカシ”あるいは”トク タカシ”
(瀬戸内町・徳田嘉光氏所蔵)

※土俵の中は、砂が入られていた。
※足のくるぶしのところまで砂を入れていた(5~6センチ程)
※引きや押し技をするものもいたが、投げ技が主であった。
住用・師玉賢二氏談(19歳時に第1回協会相撲に出場)

(投げ技中心から、押し・引き技への変化)

4. 「若人の祭典」における「全郡相撲大会」（奄美大島連合青年団主催）



「第2回 若人の祭典」(於:徳之島・天城町)の写真
(関勇三氏所蔵写真)

・1956(昭和31)年、奄美大島連合青年団が下部組織強化のために各地方で開催した「若人の祭典」の一つの行事として「全郡相撲大会」を開催。
第1回開催地は沖永良部、第2回は徳之島、第3回は瀬戸内、第4回は名瀬、第5回は笠利で開催。

・第3回「若人の祭典」瀬戸内町古仁屋での開催に際して、主催者の奄美連合青年団では相撲関係者を本部に招いて座談会を開き、協会相撲の起こり、こんどの古仁屋場所展望などを試みた。」(連合青年団長:前田信一)

「出席者は、奄美大島相撲協会長 里原慶寿、同副会長 元田正、名瀬署勤務・現協会横綱 房親則の各氏、それに協会相撲最初の大関 水間坊太郎(79)、同じく当時の横綱 山下辰次郎(66)、同じく大関 谷村昌信(65)、土岐直家さんら」の記事
(1958(昭和33)年10月20日 南海日日新聞)



第5回「若人の祭典」最後の大会
笠利・赤木名会場の写真
(関勇三氏所蔵)

※座談会において「三本勝負の制度をとっているのは奄美だけで、なるべく早く一本勝負に改めるべきだ。……」との提言を受けて、昭和33年の古仁屋場所から一本勝負になる。

以後、奄美における広域相撲は一本勝負に変わる。

※一部集落相撲においては、3本勝負も行なわれる。

5. 「奄美～沖縄親善相撲大会」の開催及び県民体育大会・国体への出場

・「若人の祭典のねらいであった下部組織が確立されたので、今後は体育行事を切り離し産業振興の力を育成すること、団員の資質向上に重点をおくことにし、体育行事は県民体育大会に移すことが決定された」

(1960(昭和35)年10月18日 南海日日新聞)

- 1968 (昭43) **沖縄の日本復帰運動の一環で「奄美～沖縄親善相撲大会」**
～
1971 (昭46) ・昭和43年(沖縄で開催, 奄美の勝利), ・44年(奄美で開催, 沖縄が勝利),
・45年(沖縄で開催, 奄美が勝利), ・46年(奄美で開催, 沖縄が勝利)
※(旧来の「沖縄角力」と一本勝負の本土式の相撲に変わった奄美側との調整)
※昭和47年 沖縄が日本に復帰

・昭40年代に入り日本相撲協会の助言のもと、奄美全郡に相撲協会を設立する動きが見られるようになる。
※各地域で固定化した土俵作りが普及し始める。

- 1971 (昭46) 鹿児島県県民体育大会の相撲競技に「大島チーム」初出場
1975 (昭50) 鹿児島県県民体育大会の相撲競技で「大島チーム」初優勝(以後19連勝)
※20連勝はならず

6. 一方で、各集落に残る特色のある豊年相撲



名瀬・仲勝



名瀬・有屋



名瀬・浦上



名瀬・小湊



住用・城集落の土俵



住用・見里集落



瀬戸内町油井の豊年祭



(参考文献) 津波高志 『沖縄側から見た奄美の文化変容』、2012年、第一書房

津波高志 『現場の奄美文化論－沖縄から向かう奄美－』、2014年、おきなわ文庫(電子出版)